

発表題目：疑問語をとりたてる極限系とりたて助詞「でも」について

大阪府立大学大学院生

しゅう かん
周 侃

1. はじめに

疑問語をとりたてる極限系とりたて助詞「でも」の構文的な特徴に関し、今までの研究では、「単純な事実や過去の1回だけの出来事には用いにくい」（日本語記述文法研究会，2009：p. 164）とされてきた。

- ・*今日の反省会にはだれでも参加した。………… (1)

（略一筆者）

- ・？いつも給食を残す田中君が今日は何でも食べた。………… (3)

（日本語記述文法研究会，2009：p. 164）

しかし、下記用例（1）が表すのは、過去の1回だけの出来事ではなく、過去の多回的な出来事であるが、「でも」が用いられている。このような言語事実は、これまでの研究では言及されていない。

- （1）父はいつでも狩りに出ていた。（『魂の指導者クロウ・ドッグ』，1998．BCCWJ）

本発表は先行研究の説明のこの不備を補い、より完全な記述を目指すものである。

以下、第2節では先行研究について述べ、本発表の立場を示す。第3節では具体的な考察を述べる。最後に第4節で本発表の主張をまとめる。

2. 先行研究

2.1 日本語記述文法研究会（2009）の主張と問題点

疑問語をとりたてる極限系とりたて助詞「でも」の構文的な特徴に関し、日本語記述文法研究会（2009）では、次のように説明されている。

「でも」は「たとえ～でも」という仮定的な意味を含むため、「疑問語でもP」は、どのような条件のもとでもPが成立することを表す。Pにくる表現は何でもよいわけではなく、基本的には、可能かどうか、許容されるかどうか、必要かどうかなどを表す表現である。単純な事実や過去の1回だけの出来事には用いにくい。たとえば、次の(1)(3)のような文は不自然である。（略一筆者）

- ・*今日の反省会にはだれでも参加した。………… (1)

(略一筆者)

- ・ ? いつも給食を残す田中君が今日は何でも食べた。 …… (3)

(p. 164)

しかし、このように、「疑問語でも P」の P に来る表現を「可能かどうか、許容されるかどうか、必要かどうかなどを表す表現」と「単純な事実や過去の 1 回だけの出来事」を表わすものと、単純に二分することは適切ではないと考えている。以下で、前田 (2009) の関連概念を引用してその理由を述べる。

2.2 前田 (2009) の関連概念と本発表の立場

前田 (2009) では、「レアリティー」による条件文の分類として、下記「仮定的レアリティー」と「非仮定的レアリティー」が言及されている。

(1) 仮定的レアリティー

条件文の典型として、次のような文が考えられるだろう。

- 5) このボタンを押せば、水が出るだろう。

これは、未実現の事態を「仮定」しており、ボタンを押すことは、まだ生起していない、かつ、これから生起する可能性のある事態である。このような事態の仮定的なレアリティーを「仮説的レアリティー」と呼び、仮説的な事態間の関係を表す場合を仮定的用法と呼ぶ。

(p. 38)

(2) 非仮定的レアリティー

条件文には、前件・後件がともに既に生起した事実である場合もあることは知られている。このような事態のレアリティーを「非仮定的レアリティー」と呼ぶ。

- 9) 太郎が殴ると、花子が泣き出してしまった。

この文では、「太郎が殴った」ことも、「花子が泣き出した」ことも事実である。こうした事態のレアリティーを非仮定的レアリティーのうち、「事實的レアリティー」と呼ぶ。

また非仮定的レアリティーには、仮定的レアリティーとの中間的な存在がある。即ち多回的事態を表す場合である。(略一筆者) もう一つは反復・習慣と呼ばれる条件文の用法であり、こちらには、テンスの分化がある。

(略一筆者)

- 11) 若い頃はお酒を飲むと頭が痛くなった。

(pp. 38-39)

本発表では、前田 (2009) に倣って、日本語記述文法研究会 (2009) による「疑問語でも

P」のPに来る表現に関する説明「可能かどうか、許容されるかどうか、必要かどうかなどを表す表現」(p. 164)を「仮定的レアリティー」と呼び、「単純な事実や過去の1回だけの出来事」(p. 164)を「非仮定的レアリティー—事後的レアリティー」と呼ぶことにする。

「非仮定的レアリティー—事後的レアリティー」には、多回的な出来事、ひいては、反復・習慣的な出来事が含まれると考える。そうだとすれば、このような事態においては、「疑問語でもP」が用いられると考えられる。次の例は、そのことを裏付けるものである。

(1) 父はいつでも狩りに出ていた。(再掲)

しかし、このことに関し、日本語記述文法研究会(2009)には言及されていない。本発表では、日本語記述文法研究会(2009)のこの不備を補うため、多回的な出来事(反復・習慣)における「疑問語でもP」の文について考察を行った。

2.3 工藤(1995)による動詞の分類について

本発表で考察した動詞述語文で用いられる動詞をさらに工藤(1995)に照らして検討してみた。当てはまるのはそのうち(A)外的運動動詞だけであった。以下(A)外的運動動詞の概要を抜粋という形で示しておく。

(A) 外的運動動詞

(A・1) 主体動作・客体変化動詞<内的限界動詞> [他動詞]

- ① 客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞
- ② 所有関係の変化をひきおこす動詞

(A・2) 主体変化動詞<内的限界動詞>

- ① 主体変化・主体動作動詞 [再帰動詞]
- ② 人の意志的な(位置・姿勢)変化動詞 [自動詞]
- ③ ものの無意志的な(状態・位置)変化動詞 [自動詞]

(A・3) 主体動作動詞<非内的限界動詞>

- ① 主体動作・客体動き動詞 [他動詞]
- ② 主体動作・客体接触動詞 [他動詞]
- ③ 人の認識活動・言語活動・表現活動動詞 [他動詞]
- ④ 人の意志的動作動詞 [自動詞]
- ⑤ 人の長期的動作動詞 [他動詞, 自動詞]
- ⑥ ものの非意志的な動き(現象)動詞 [自動詞]

(pp. 73-76)

3. 考察

本発表では、BCCWJ(中納言)を用いて、地の文を中心に用例を収集し考察した。

そして、多回的な出来事（反復・習慣）は、必ず具体的な動作を伴う動作動詞で表すと考えられるため、本発表では、「知る」、「愛する」などの心理動詞と、存在動詞「いる、ある」を考察の対象から外し、具体的な動作を伴う動作動詞の動詞述語文を考察した。

以下、3.1 では、考察の内訳を示し、3.2 では、工藤（1995）の基準による分類の結果と、具体的な用例を示す。

3.1 考察の内訳について

表1は、考察した用例数と、多回的な出来事（反復・習慣）の該当用例数である。

説明の便宜上、以下で「非仮定的レアリティー—事実的レアリティー」における「多回的な出来事（反復・習慣）」の用例を「非・多」で示す。

表1

疑問語+でも	だれでも	何でも	いつでも	どこでも	合計
総用例数	1962	4589	2176	814	9541
「非・多」の 用例数等	1 (0.05%)	11 (0.2%)	5 (0.2%)	4 (0.5%)	21 (0.2%)

3.2 工藤（1995）による分類の結果及び具体的な用例について

表2は、「非・多」の21例を、さらに工藤（1995）の基準により分類した結果である。

用例における考察の結果により、「非・多」の例は、(A・1)の「①、②」、(A・2)の「②」、(A・3)の「②、③、④、⑤」にはあったが、(A・2)の「①、③」、(A・3)の「①、⑥」にはないことが分かった。

表2

(A・1)	①	②				
非・多～	○	○				
(A・2)	①	②	③			
非・多～	—	○	—			
(A・3)	①	②	③	④	⑤	⑥
非・多～	—	○	○	○	○	—

以下は、具体的な用例である。

(A) 外的運動動詞

(A・1) 主体動作・客体変化動詞＜内的限界動詞＞〔他動詞〕

①客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞（縫う、獲る、作る）

- (2) ウィーンで手に入る毛皮はなんでも縫った。(『ウィーン素描』1997)
- (3) 漁の腕には自信があった。ノリや貝だけでなく、沖に出てカレイやコチ、アイナメなど何でも獲った。(『東京湾が死んだ日』2005)
- (4) 小さい孫たちのかわいい洋服はいつでも作ってくれていた。(『されど道づれ嫁姑』1995)

②所有関係の変化をひきおこす動詞（買う、与える）

- (5) バブルの時代に、私たちは何でも買った。要らないものまで時には借金をして買って、狭い家がいっぱいになった。(『人はなぜ戦いに行くのか』2004)
- (6) 父親は娘を溺愛していたよ。ほしいものは何でも与えていた。(『心すれちがう夜』2003)

(A・2) 主体変化動詞＜内的限界動詞＞

②人の意志的な（位置・姿勢）変化動詞〔自動詞〕（行く、来る、出る）

- (7) その後で父は言うのだった。「息子よ、一緒に来るがいい。ヒュポ！」と。それで私はいつでも彼と一緒に行った。(『魂の指導者クロウ・ドッグ』1998)
- (8) 逆に、「親方、ひとつ張りませんか」ときて、九重親方を呆れさせた。そのうえ何でも師匠に訊きにきた。(『千代の富士一代』1991)
- (1") 父はいつでも狩りに出ている。(再掲)

(A・3) 主体動作動詞＜非内的限界動詞＞

②主体動作・客体接触動詞〔他動詞〕（待つ、もてなす、遇する、食べる）

- (9) 検査はどこでも待たされた。(『母を看取るすべての娘へ』1997)
- (10) ところがこの飢饉のときは、くる客はだれでも手あつくもてなした。(『続々日本史こぼれ話』2003)
- (11) 寿々は伝七郎の許婚だったとすでに紹介されていた。どこでも相応に遇された。(『黒染の剣』2002)
- (12) 普通の人が適量とったところで何ともない合成保存料入りの食べ物や、市販されている薬、病院でもらう薬、調味料、農薬を使った生鮮品などを口にすると、また、石けんやシャンプーなどを使っても熱が出て体が痛くなる。以前は、それらのけだるさは前出のさまざまなものが原因だと分からなくて、栄養をとるつもりで何でも食べていた。(『気まぐれ雑記帳』2004)

③人の認識活動・言語活動・表現活動動詞〔他動詞〕（言う、話す、教える、見つめる）

- (13) 「ああ、漫才か」そのころ、どこでもこういわれた。(『「東京漫才」列伝』2002)
- (14) ときどき黙っていると、「何か話して。話さない」って、かあさんというんです。そのたんびに私はおしゃべりになって、何でも母に話していました。(『明日はわが身』1981)
- (15) 小泉さんは横浜市内の公立高校で国語、英語、社会科、物理、数学、なんでもご

ざれで教えていた。(『ヴァイオリン万華鏡』2003)

- (16) 若いアベックは、サン＝ミッシェル橋をゆっくりと渡って、橋のまんなかで立ちどまり、船が一行になって通りすぎるのをながめたり、水の流れを見たり、二人が抱き合いながら示す二人の生の歓喜だけに夢中になっているので目につくものは何でも見つめたりしていた。(『メグレたてつく』2001)

④人の意志的動作動詞〔自動詞〕(付く、応じる)

- (17) 先生がやることには何でも付いて行きましたよ。(『同じ年に生まれて』2004)

- (18) 地図でしか知らない遠い土地が、魅惑的な伝説を伝えてもらいたくて手招きし、彼はいつでもその招きに応じた。(『愛をつないで』2003)

⑤人の長期的動作動詞〔他動詞, 自動詞〕(つとめる、付き合う、交わる)

- (19) 然し彼はいつでも女性に對して戀人の役目をつとめてゐなかつた。(『有島武郎全集』1988)

- (20) 「鮎川とはどんなことして遊びましたか?」「そう…なんでも付き合ってくれましたよ。おままごと、なんかも」(『幽霊船長』1987)

- (21) 真澄はどこでも地方の文人たちと交わった。歌を詠み、書画をよくした。(『日本のこころ』2001)

4. 終わりに

先行研究を踏まえ、本稿の結論として、以下の2点をまとめておく。

- (1) 従来の研究では触れられていないが、疑問語をとりたてる「でも」は、「非仮定的レアリティー—事實的レアリティー」における1回だけの出来事においては、用いにくい、多回的な出来事においては用いられる。
- (2) 多回的な出来事において用いられる動詞は、工藤真由美(1995)の(A)外的運動動詞のすべてではなく、その中の意志性を持つものに限られている。

参考文献:

- 工藤真由美(1995) 『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
日本語記述文法研究会(2009) 『現代日本語文法5』くろしお出版
前田直子(2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版